

歴史館だより



- 再検証「鮎貝宗信謀反事件」～政宗・義光の不和発端説の誤りを正す
- 軍記史料・記録類における最上義光の戦歴
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No. 5
- Yamagata三昧「山の呼びかけに応えながら」
- 研究余滴⑮「細川忠利の手紙から」

No.22
2015年3月発行



最上義光歴史館

再検証 「鮎貝宗信謀反事件」

政宗・義光の不和発端説の誤りを正す

大沢 慶 尋

「鮎貝（白鷹町鮎貝を中心とする地頭）のことは、（政宗自らが米沢城から）出馬したので、直ちに（当主鮎貝宗信を）自落（他氏領国への落ち延び）させる。早々に（鮎貝）城中へ打ち入るので詳しくは述べない」。現在いうところの「鮎貝宗信の政宗への謀反事件の勃発」である。その慌ただしい状況下で認められた天正十五年「十月十四日、伊達五郎（成実）宛、伊達政宗書

状」（図1 仙一四三）中の記載である。

この事件を『貞山公治家記録』天正十五年十月十四日の条は、『鮎貝宗重入道日傾齋より「嫡子宗信とずっとずつと私は不和の上、最上義光の勧めで（伊達政宗に対する）謀反の企てがあった。私はしきりに意見したが聞き入れなかつた。このたびすでに鮎貝城に拠つて兵を起こそうとした。私（宗重）は高玉（白鷹町）へ退出した。すみやかに宗信を退治してほしい。」と言上してきた。（政宗公は）時刻を移さずすぐに誅伐すると仰せ出だされた。その時、老臣らは協議して「最上より加勢があるだろう。特に宗信の他にも（伊達家中に）内通の者があるかもしれない。」と政宗に言上した。』と記す。このように、元禄期編纂の伊達家の正史『貞山公治家記録』は、この鮎貝父子の一件を、

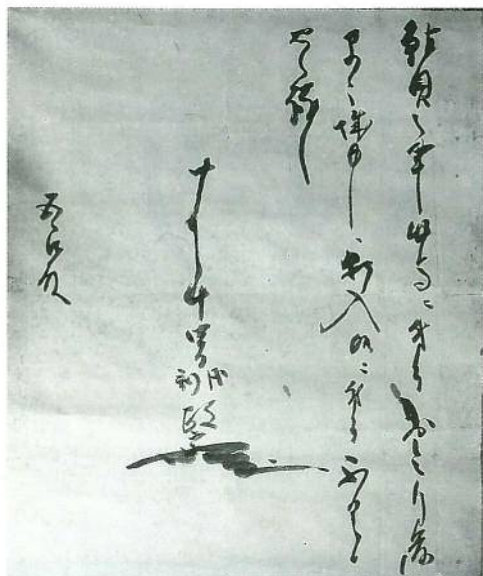


図1 伊達政宗書状（竹田 秀氏所蔵）

に宗信を退治してほしい。」と言上してきた。（政宗公は）時刻を移さずすぐに誅伐すると仰せ出だされた。その時、老臣らは協議して「最上より加勢があるだろう。特に宗信の他にも（伊達家中に）内通の者があるかもしれない。」と政宗に言上した。』と記す。このように、元禄期編纂の伊達家の正史『貞山公治家記録』は、この鮎貝父子の一件を、

(1) 伊達政宗に対する鮎貝宗信の謀反。
(2) 最上義光が鮎貝宗信に勧めたことによる謀反。
としており、この説は現在定説となっている。

さらに『貞山公治家記録』は、「乱を武力鎮圧し鮎貝宗信を自落させた後、政宗は鮎貝日傾齋（宗重）の忠義の志に感謝し、柴田郡の内に采地を与え、二男の七郎宗益を家督に命じ、もとのように伊達家中では一家の上座において。」と続ける。

(3) 政宗が事件後、鮎貝氏をいかにも手厚く処置した。
という表現である。

果たして、(1)・(2)・(3)は真実なのか。以下、後世の編さん書ではなく、確かな同時代史料のみから検証していこう。

同じく事件勃発の天正十五年「十月十四日、桜田兵衛資親宛、伊達政宗書状」（仙一四一）には次の記載がある。

① 鮎貝の地において、父で隠居している鮎貝宗重と当主宗信父子の間が取り乱れ、隠居している宗重が鮎貝から高玉へと除かれ、難しい事態となっているので、政宗自身今日下長井へ出陣し下知をもって静める。

② 最上氏と伊達氏の境目のことなので、心得ておくように。

①より、鮎貝父子の紛争に、政宗が自らの意志で軍事介入したことがわかる。②より、政宗は軍事進攻する鮎貝

の地が最上領との境目であることから警戒していることがわかる。

さらに、同日の天正十五年「十月十四日、後藤孫兵衛信康宛、伊達政宗書状写」（仙一四四）には次の記載がある。

③ 鮎貝親子（鮎貝宗重と当主宗信親子）の間に紛争がおき、隠居している宗重らの面々とその仲間（一派）が取り除かれた。政宗はそのまま出陣し鮎貝へ押し寄せて合戦に及び、（宗信の兵）五十人余りを討ち取り、鮎貝城の実城（本丸）ばかりが残る状態となっている。明日は実城を押し破るであろうからご安心ください。

④ その上、最上との国境あたりは何事もなく静かである。

以上、①・③より、この事件を当初政宗は「鮎貝父子間の紛争」と認識し、政宗自身の判断で鮎貝城へ向けて出陣し宗信を攻めたことが判明する。④よりこの一件で義光は鮎貝宗信に加勢せず全く動いていないことが判明する。

しかし、天正十五年「十一月四日、宮沢元実宛、伊達政宗書状写」（仙一五〇）では、一変して次のような表現となる。

⑤ 鮎貝宗信のことは去る十月十四日伊達氏に対する逆意（謀反）を企てたけれども、即刻出馬し、数百人を討ち取り、そのまま鮎貝城に押し詰めたので、鮎貝勢は一日も支えられず、その夜鮎貝宗信は行方知れずになって失踪して

しまった。これによりすぐに仕置き(処置・裁定)を行い、翌日十五日に米沢城に馬を納めた。

⑥その後、何事もなくいかにも静かで平和そのものである。

事件勃発当初「鮎貝父子間の紛争」と認識した政宗が⑤により、その十九日後に「鮎貝宗信による伊達政宗への謀反」と認識を一変させていることが判明する。政宗はこの事件が「鮎貝父子間の紛争」であるという事実を勃発当初から完全に認識していたにもかかわらず、十九日後の十一月四日に「鮎貝宗信による伊達政宗への謀反」であると事実のねつ造を行い、それを家中に宣伝し始めたと考えられるのである。

⑥は、④と合わせ読むと義光がこの件で最後まで一切加勢せず全く動かなかったことを証明するものである。さらに、鮎貝の一件に義光が関係していることを示す史料は、政宗自身の発給書状をはじめリアルタイムのものは一切なく、政宗自身義光が関係しているとの認識を持っていなかったと考える。『貞山公治家記録』編者が「最上義光ノ勸メニ依テ叛逆ノ企アリ。」と自らの解釈を記した可能性が極めて高く、事実としては義光はこの一件に全く関係していない公算が極めて高い。

政宗は、鮎貝氏が最上領の境目を領する大きな勢力をもち、伊達家中で「一家」の最上位という位置付けの一方で、

伊達氏とは独立した鮎貝七郷を領する国人であることに不安を覚えていた。鮎貝氏が近い将来最上氏と同心し、さらに近隣の境目の「伊達氏の従属国人であるが伊達氏・最上氏の両属的性格をもつ国人(中山の小国氏など)」らとともに、一大勢力となつて伊達氏に敵対することになることに大きな脅威を感じていた。そのため鮎貝氏を境目の地から排除し伊達氏の完全家臣化したいと考えていた。そんな折、「鮎貝父子間の紛争」が勃発したのを好機ととらえ、政宗自ら大軍を率い鮎貝領に出陣し、当主宗信を最上領に自落させ、事後処理として鮎貝氏を柴田郡内へ移し、伊達氏の完全家臣化することに成功したというのが真相であろう。

実は鮎貝氏は、政宗の出自と同じ藤原北家の山蔭中納言を祖とし、その孫の藤原安親が下長井荘の荘官となり、やがて武士として土着化した氏族で、伊達氏に全く劣らぬ名門であった。それもまた政宗にとっての脅威の一つであったろう。

現在、この鮎貝の一件を、「最上義光が北の庄内へ侵攻しそれに集中しており、南の伊達氏からの侵攻を恐れ、その手だてとして義光が鮎貝宗信に勧めて謀反事件を勃発させた。これにより政宗・義光の不和が決定的となった。」と説かれる傾向にある。しかし、

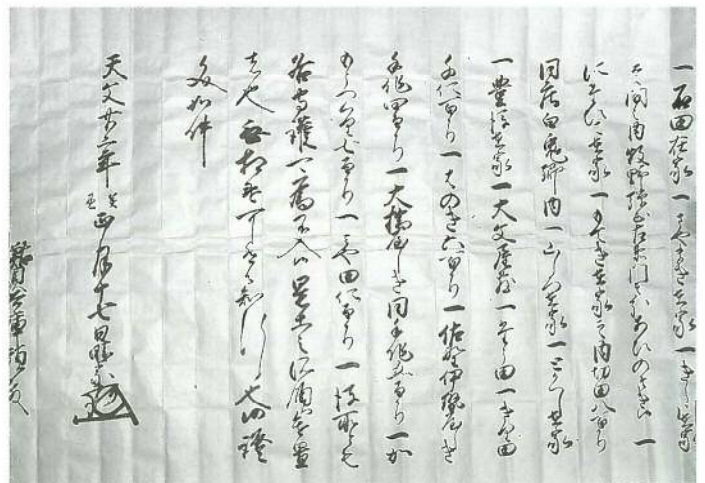


図2 伊達晴宗知行状(部分 鮎貝宗房氏所蔵)

これは逆に庄内侵攻で手一杯で義光が介入できないこの時期を好機ととらえ、政宗が鮎貝領へ軍事侵攻し、自らの目的を果たしたというのが実情であると考える。

本来、伊達氏は独立国人である鮎貝氏の本領七郷、そして「天文二十二年正月十七日、鮎貝兵庫頭宛、伊達晴宗知行状」(図2)で保証していた「守護不入」特権(棟役・段銭・諸公事を免除された上に、守護伊達氏の裁判権・検断権の不入を許されること)を有する知行地には入ることができないルールであった。しかしそれを犯して

政宗が侵攻するには「正当なる理由」
「政宗への謀反」を創出する必要があったと解されるのである。

尚、政宗・義光の不和が決定的となつたのは、天正十五年八月政宗の斡旋により成立した義光と庄内の大宝寺義興の和睦が、十月の義光の庄内侵攻により破綻したことによる。

《註》

・鮎貝氏は本領「最上川左岸の鮎貝・山口・箕和田・高岡・深山・黒鴨・栃窪の七郷」を領する伊達氏とは独立した国人であった。

・本文中の「仙一四一」・「仙一五〇」は『仙台市史資料編』10(一九九四年)掲載の「二四一号」・「二五〇号」文書の略。

略歴

大沢慶尋(おさきわ よしひろ)

一九六七年生まれ。國學院大學史学科(日本中世史)卒。國學院大學専攻科修了。

現在、「歴史博物館青葉城資料展示館」主任学芸員、NHK文化センター仙台教室講師。

調査・研究領域：戦国時代～江戸時代初期の伊達氏、仙台城。

【主な著書】

「天正二年最上の乱」の基礎的研究

—新発見史料を含めた検討—

『青葉城資料展示館研究報告 特別号』平成十四年二月

【編纂書】

伊達家臣湯村家文書

—近世・近代編—

『青葉城資料展示館研究報告 一号』平成十八年七月

「軍記史料・記録類における 最上義光の戦歴」

内野 広一

本稿では、軍記史料や諸記録に記載されている最上義光の戦歴を列挙する。

本来であれば、一次史料を用いて検討すべき所ではあるが、最上家関連の史料は散逸が激しく、そのみを用いて義光の戦歴を追うことは困難である。ゆえに、軍記史料の中でも比較的成立年代が古く、記載内容に信頼の置ける部分が多数あると考えられている『最上記』『奥羽永慶軍記』やその他記録類を用いた上で、その記載内容に関連する一次史料を挙げるにより事実上確かにその合戦が存在した事実を補強することとした。

凡例

下表では、「最上義光が直接指揮し、総大将をつとめた」とみられる「記述がある合戦のみを抜粋した。」

合戦名「主戦場となった城名もしくは地名＋合戦とした。」

勝敗 義光攻撃側：敵大将を討ち取る、城を落とすなどした場合勝利、戦略的目標を達成できず損害を出して撤退した場合は敗北と定義し、当てはまらない場合引き分けとした。

最上義光の戦歴

義光防衛側：攻撃側の戦略目的を達成させず、撤退に追い込んだ場合勝利。攻撃側が最上家の軍勢を打ち破る、城を落とすなどした場合を敗北と定義した。

軍記資料における戦績一覧

No.	戦名	勝敗	敵方大将	年代	最上記	永慶	備考
1	寒河江氏攻め	●	寒河江兼広	1560			『安中坊系譜』 義光初陣か
2	橋下・中山合戦※1	分	伊達輝宗	1574/5			『伊達輝宗日記』
3	中山口合戦※1	分	伊達輝宗	1574/8			『伊達輝宗日記』
4	第一次天童合戦	●	天童頼久	1577	○	○	
5	第二次天童合戦	○	天童頼澄	1584	○	○	最上氏領国化
6	谷地城合戦	○	白鳥衆	1584	○	○	最上氏領国化
7	達磨が原合戦	○	羽柴勘十郎	1584	○	○	
8	寒河江城合戦	○	寒河江高基	1584	○	○	最上氏領国化
9	八沼城合戦	○	岸美濃守	?	○	○	最上氏領国化
10	柏木山合戦	分	伊達輝宗	?	○	○	※2
11	鮭延城合戦	○	鮭延秀綱	1581	○	○	『楓軒文書纂所収文書』他 ※3
12	有屋峠合戦	●	小野寺義道	1586		○	
13	尾浦城合戦	○	※4	1587	○	○	※4
14	長谷堂合戦	○	直江兼統	1600	○	○	「上杉家文書」他

○勝利／●敗北

義光が敵総大将 敵方の総大将を討ち取った。年代 推定年代を記した。

最上記「永慶」 『最上記』『奥羽永慶軍記』に記載の有無を記した。

備考 記載内容の裏づけとなる書状史料や、記録類を記した。また、直接の史料は存在しないものの、その後当該する地域が最上家の領国となっている事が傍証となる合戦はその旨を記した。

※1 この二つの合戦は、軍記史料には記されていないものの、『伊達輝宗日記』に経過が詳細に記されている合戦であることからこの表に加えた。係争地域が義光の本拠周辺である現在の山形市・上市市にかけてであること、相手方が義光の父義守と反義光派の国人衆ならびに伊達輝宗であり、義光にとって危急存亡の状況であったことから、義光自身が当合戦の指揮を執ったことは明白であろう。

※2 近年の研究では、柏木山合戦は存在しなかったのではないかと論が主流である。おそらく、天正2(1574)年に義光と伊達輝宗が中山・橋下において合戦した事実(※1)と、天正16(1588)年に義光と伊達政宗が合戦し、義姫がその仲裁を行った事実(戸蒔文書ほか)が混同されたものであろう。

※3 軍記史料では、鮭延攻めは義光が総大将をつとめたとされているが、実際は重臣の氏家守棟が当該地域一帯の経略を実行したようである(『楓軒文書纂所収文書』)。

※4 軍記史料では、敵方大将を武藤光安としているが、「悪屋形」と呼称されていることから、これは武藤義氏の事を指していると考えられる。義氏は天正11(1583)年に側近の前森藏人に背かれ自害した。義光が直接の武力をもって庄内を経略した天正15(1587)年には、その跡目は弟の義興が継いでいた。義光が庄内を攻めて武藤義興を攻め滅ぼした事実と、義氏敗死の事実とが混同されたものであろう。

義光会だより

No. 5
2015年3月



題字 齋藤蕉石

義光公没後四百年義光会記念植樹

平成二十六年四月十九日、昨年記念植樹した紅枝垂れ桜が見頃を迎え義光会の方々が一年目の花見を迎えた。義光会の会員と歴史館職員の志により、苦心して植付けた桜が見事に花を咲かせ皆さんで喜びました。同じ大きさの紅枝垂れ桜が二十年前に植付けられた市内某所で発見。記念植樹したこの桜も二十年後にはこれ程まで立派に育ち歴史館前が名所となっていると想像しますと、この記念植樹がいかに有意義なものと改めて思いました。しかも、二十年の歳月で霞城公園の



記念植樹にて

二の丸と本丸御殿が復元していると考えますと、城下町山形が東北でも有数の観光都市となり桜の名所として観光客が多数訪れ歴史館にも来館されていると思うだけでも素晴らしい事ではないでしょうか。

尚、この日四月十九日は芦野新館長の歓迎会が義光会のメンバーの方々、多数出席して盛大に行われました。

東北六魂祭二〇一四山形で 武将隊も参加

二〇一四年五月二十四日〜二十五日開催された東北六魂祭二〇一四年山形では、戦後最大二十六万人の観光客が訪れ山新メデアタワーから山形市立五中までの四車線道路は沿道の人々で埋めつくされました。

青森ねぶた、秋田竿灯、盛岡さんさ、仙台七夕、福島わらじ、山形花笠のお祭りが繰り出し、勇壮華麗、ダイナミックな東北の祭りを堪能する事が出来ました。二〇一五年は秋田で開催されますが「継続は力」です。東北の一大イベントとして歴史を繋いで欲しいと思います。

最上義光武将隊も、多数の来館者への甲冑体験や記念写真等で、県内外の観光客に大きくアピールしました。

山形市制一二五周年式典で教育、文化功労章として義光会活動表彰

二十六年七月一日付歴史館案内や義光こども講座、各種イベントでの武将隊の活躍等により、市制一二五周年式典に於いて山形市長より表彰されました。

義光会の方々や歴史館職員の方々の努力が評価され大きな励みとなりました。七月二十八日千歳館にて多数の方々が出席され祝賀会が催されました。

平成二十六年度スキルアップ現地研修 鶴岡地区最上氏ゆかりの史跡を訪ねる

九月三日義光会三十一名と芦野館長、揚妻学芸員総勢三十三名、山交大型バスに乗車六時三〇分歴史館前を出発しました。目的地までの車中では多田副会長作成資料により、事前研修予習をして頭の準備しながら最初の目的地、六十里街道松根入口、松根城址、最上院、松根東洋城句碑(最上改易の後、伊予、宇和島藩家老職にあった松根家子孫)等、櫛引、丸岡の案内者前田氏より車窓から案内して頂きました。

8時35分 丸岡城址にて天澤寺(里見一族の墓所)、加藤清正公墓碑、丸岡城址、遺構、常楽院では義康公の首桶、更に首なし地藏、修理塚を研修。

11時15分 鶴岡山常念寺(義康公位碑、愛用の薙刀、義光公発給文書等)、昼食は庄内物産館の大変美味しい海鮮弁当をいただきました。13時15分 十五里ヶ原古戦場、尾浦城大山城址では、庄内最大の山城を実感。

15時30分 藤島地区、新聞因幡守久正が中心として作った因幡堰、北楯大学の北楯大堰等、庄内百万石の礎となった農業土木改良工事は、現代も庄内地区多くの農業関係者より感謝されていることを実感しました。内陸地区より庄内地区の方々が最上義光公への崇敬の念があるのではないかと感じました。

18時45分 無事に歴史館前に到着。全体感想として、事前資料での学習をして庄内地区の案内人の方々から懇切丁寧な説明を受ける事が出来たのは、事前資料の作成と事前のコンタクトが多田副会長より準備して頂いた賜物と感じました。

庄内地区における最上家のかかわり、庄内百万石の基礎による義光公への崇敬の思い、嫡男義康公の悲劇等、大変理解でき館内案内のスキルアップに大きく貢献した現地研修会でありました。何よりも現地、現物、「百聞は一見にしかず」です。今後共、現地研修会の継続を希望します。ありがとうございました。

編集後記

義光会の運営を推進する役員選出について、これまで長期に渡り活躍して頂いている役員の方々の後継者づくりを推進するため、役員一同が中心となり、役員選出方法等のルール作りを作って頂きました。各義光会会員の活発な意見により、二回程臨時総会が開催され議論し、大変立派なルールが完成し将来に渡る役員選出がスムーズに行われる様になる事は、大変意義ある事だと思っております。



(長岡)

○平成26年度事業スナップ



○「出張！古文書長屋
in 最上義光歴史館」
古文書の相談承ります



○山大博の古文書展…大盛況のギャラリートーク 講師/森谷園人先生



○山大博と初コラボ!! 企画立案から展示作業まで
学生さんたちが参加した展覧会です



○三鍬形が実物と同じに改良された
義光役兜!!



○祝!! 義光会が山形市制施行125周年記念功労表彰を受賞



○最上義光武将隊発足!!
「山形まるごとマラソン2014」と「街なか賑わいフェス」に出陣!!



夏休み ver.

※最上義光歴史館の最新情報は
公式ホームページをご覧ください。
<http://mogamiyoshiaki.jp>



○大好評の市民の宝モノ2015高嶋祥光展!!
市民から多数ご出品いただきました



文化の秋 ver.

○みんなで学ぼう! ヨシアキくん
~山形城を探検しよう!!~

山の呼びかけに応えながら

リサ・ソマーズ



はじめの②歩

先日、いままで見たことのない角度から山形を目にしました。それは、友人数人と登った標高1,484メートルの雁戸山山頂から見た山形でした。

登山好きの方が多く日本では、これはけっして珍しい話ではないでしょう。しかし私にとってはかなり大きな出来事でした。なぜなら、日本に来て四半世紀近く経っていながら、実は雁戸山が初めて登った日本の山だったからです。

振り返ってみれば、実に不思議です。70%以上が山岳地帯で占められている日本の場合、山道を選べるのは難しいはずですが、なぜ今まで通ろうとしたことがなかったのでしょうか？本来私は、自然が大好きで、歩くことも嫌いではないのです。また、山形に来る以前20年近く住んでいた富山県ももちろん山だらけでした。なのに、なぜその山々に登ろうとしなかったでしょう。

もしかすると、山形と富山の山が違うのでしょうか。富山と言えば北アルプスの一部である立山連峰が有名です。確かに当時の家からも毎日眺めていた素晴らしい山の景色だったのですが、それはあまり雄大で、登るのには登山の国家資格でも必要ではなかろうかと思わせる山々でありました。

その一方、山形の山は見るものを圧倒するというよりも、私みたいな初心者の登山者ですら歓迎してくれるように感じます。特に初心者に優しい山と言えば、山形市内の平清水に住む自分には「裏庭」とも感じられる千歳山があります。恥ずかしいことですが、平清水に住み始めてから3年以上経つのに、初めて登る気になったのはつい最近です。しかし、登りはじめたら、千歳山のさまざまな山道を登りたい、と足がムズムズするようになりました。

山形に来てから、なぜこのように足が山へ向くようになったのでしょうか。日本の大部分が山であるとはいえ、ひょっとしたら地域によってその山の持つ「声」が違うということではないでしょうか。そして、山形の山々が持つ声は、少しでも聞く気がある人の耳にはまんべんなく届く、そういう声なのではないかとも思えます。

アメリカ東海岸生まれの私は大学生になるまで、父親の仕事の関係で引っ越しを繰り返していました。一つの地域から別の地域へ、アメリカから出て外国にも住んだことがありました。その経験があったからだと思いますが、日本に来てからもいままでは住む環境にあまりこだわらず執着せず、流動的な生活をしてきました。環境の変化に特に困らず、どこにでも住めるような気がします。その一方で、環境に対して少し鈍感になっていたのかも知れません。

しかしこの山形では山々の声はそんな私の鈍い耳にも力強く届き、今はその声を聞かずにいられなくなりました。私は山形で日本生活の新しいステージに突入した気がしています。

歌好きな娘が、先日小学校から帰りながら新しく覚えた歌を口ずさんでいました。「お〜い、おしゃれなサクランボ、遥か蔵王が呼んでいる…」山形の山はやはりそうだと、そのとき思いました。そして、私もこの地方の山に呼ばれているような気がします。その声に耳を傾けて、身近なさまざまな山道を一步一步踏みしめながら、自分の足で山形をさらに知ってゆきたいと思います。

Lisa Somers (リサ・ソマーズ) 翻訳者・通訳/山形市在住

平成26年度事業

展示事業

○企画展 《4月1日から同月6日 前年度継続》

「市民の宝モノ2014」展

○常設展示Ⅰ 《4月8日から7月21日》

「武士[rononoto]の晴れ姿」

那須与一射扇図屏風、木曾義仲最期図・屋島合戦図屏風、大坂夏の陣図、那須与一、射扇図屏風(未完) / 青山永耕作

○肖像画の特別公開 《4月16日から5月18日》

「坂紀伊守像」「坂重内光重像」「北館大学助利長像」

○常設展示Ⅱ 《7月23日から11月6日》

「鎌倉美2014」

「武士[rononoto]と日本刀」

「栗田口則国」「長船景光」「来国光」等、武士との関わりがわかる刀剣10振

○特別展 《11月8日から1月16日》

「山形大学附属博物館の古文書展」

「家の都合・男女の事情」

○企画展 《1月20日から4月5日》

「市民の宝モノ2015」展

「高嶋祥光生誕120年記念」

出品32件 / 35点・出品者15名

普及啓発事業 (主な事業)

○2つも講座

「ヨシアキ☆すく〜る!?」〜山形の殿様、義光公を知ろう!〜

講師/最上義光歴史館サポータークラブ「義光会」

7月10日 山形市立第二小学校 四年生

9月11日 山形市立第十小学校 四年生

9月25日 山形市立明治小学校 四年生

10月14日 山形市立出羽小学校 四年生

11月11日 山形市立高瀬小学校 四年生

11月12日 山形市立東沢小学校 四年生

11月18日 山形市立第四小学校 四年生

11月26日 山形市立第一小学校 四年生

11月27日 山形市立福山小学校 四年生

11月28日 山形市立第七小学校 四年生

○親子歴史講座

「みんなで学ぼう!ヨシアキくん」〜山形城を探検しよう!!!

講師/最上義光歴史館サポータークラブ「義光会」

夏休み特別企画 《8月3日・10日》

文化の秋特別企画 《11月2日》

冬休み特別企画 《12月27日・28日》



細川忠利の手紙から

長谷勘三郎

『細川家史料』元和八年(一六二二)の巻は、当時の小倉藩主細川忠利が国許の魚住伝左衛門あてに書いた書簡の集成である。

四月二十四日の書状では、將軍秀忠の日光社参のときの異常な厳戒に注意を向けている。

「このほか御用心にて、東照宮を二重三重にとりまわし、見張り警戒を仰せつけられたそう。お供の数も五、六万人もいただろうということだ」
平和なはずの社参が、ただならぬ厳戒のなかでなされたのである。

幕府発足後まだ十年そこそこ、泰平の世といっても、けっして安泰ではなかった。

山形も元和三年の家親没後は、重臣たちの反目がつよまり政権はばらばら、元和六年からは幕府の横目付が山形城二の丸に常駐して、監視、指導を強めていた。

さて、本史料には何カ所かに「東国大名に、帰国許可が出ていない」という趣旨の記載がある。四月から毎月のようにこれがある。日光での厳戒と関係がありそうだ。

それと並んで忠利は、最上家の行方に注目している。「最上の身上も近々果ててしまふだろうとうわさ。見聞きするところその通りらしい」と書き、その一方「最上家は祖父義光の時から徳川家に心入れ深く、その子家親は幼

少より江戸勤務で將軍に奉公したので、この度は新しい国を下さることで相済みとなつた」と、一件落着と思つたこともあつた。

彼の心中、最上家親とともに初めて宮中へ参内した若き日の記憶が鮮明に残っていただろう。慶長十年(一六〇五)四月九日、初夏の晴れた日、忠利も家親も侍従に叙任された。二人とも二十歳前後の貴公子、名門大名の後継者だつた。だが今、最上家は浮沈存亡の危機にある。

忠利は心配していた。八月十日、「最前も申し上げた最上のことだが、將軍様の前で決定したとおりにいかず、家老どもが勝手を言つて決着がつかぬ」そして八月半ば、五十七万石最上家は改易。近江大森一万石となる。

九月二日「東国大名衆は今なお江戸に逗留中。最上の跡に誰が入るかかわからない」。九月二十二日「最上の跡山形・鳥居左京父子、新庄・戸沢右京、鶴岡・酒井家次父子等。決めたのは土居、酒井」。幕政初期の実力者だ。

最上家信は父祖の地最上にもどころとはできなかつただろう。
忠利の書状に最上重臣の動静はあるが、家信には触れられていない。
「最上義光の弟で伊達政宗の叔父にあたる楯岡甲斐守光直を、わが細川家が預かることとなつた」と、やや緊張ぎみの報らせだ。

最上家改易、後任者決定。
東国大名諸侯も帰国の許しが出て、自国でゆつくりできたのだろう。

平成27年度事業

1. 展示事業

(1) 特別展・企画展

①山形大学附属博物館の掛軸展「幸せを願う絵画」
(7月11日～9月13日)

山形大学と共同で大学の附属博物館の収蔵品を展示紹介します。

②「市民の宝モノ」展(継続企画)
(7月20日～4月)

山形市民を対象に、所蔵する「宝モノ」を募集して、歴史館で選考して展示し、広く一般に公開する市民参加型の展示会で。

(2) 常設展示

最上義光を中心とした最上家関係資料と山形城関係資料。山形に関わる文化財などを展示紹介しながらテーマを定めて一部コーナー展示を行います。

①「織」(Waga)の美(2016)(4月8日～7月8日)
②「仮称」屏風絵展(9月16日～11月18日)
(3) 特別公開

①最上家臣の肖像画(4月16日～5月18日)
最上義光の重臣坂紀伊守光秀と徳川家康の没後四百年を記念して、両者の肖像画と、坂家二代坂重内光重の肖像画を公開します。

2. 普及啓発事業(主な事業)
(1) 歴史講座
①こども講座「シシアキ☆すく〜る!」
山形市内の小学校に出向き、郷土の歴史に触れる機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心を育てる一助とします。

(2) ボランティアに係わる事業
最上義光と最上家を啓蒙することについて歴史館とともに活動する市民が、ボランティアという形で歴史館のサポートとなつて、来館者の多様化するニーズに応え、きめ細かなサービスの提供を図るとともに、歴史館を核としたコミュニティを創出します。

3. 受託事業(最上義光歴史館体験型文化振興事業)
※予定
(1) 親子歴史講座「みんなで学ぼう!最上義光のひみつ!」
夏休み冬休みの期間に親子で最上義光を中心に郷土の歴史や文化を学ぶ機会をつくります。
(2) 記念イベント「親子甲冑体験講座」
最上義光公の命日1月18日に合わせて、甲冑着用体験等のワークショップを含むイベントを実施する。

※詳細については最上義光歴史館へお問い合わせください。

表紙の写真

平成二十六年度は、山形大学附属博物館と共同で企画した特別展「山形大学附属博物館の古文書展」(家の都合・男女の事情)を開催しました。山形大学附属博物館は、数万点の古文書を保管・管理しており、今回はその中から「家の都合、男女の事情」というテーマで、江戸時代庶民の生活・地域社会との関わりが想起される古文書を選び展示しました。大学生にも積極的に企画に参加していただき、幅広い来館者から好評をいただきました。写真は十一月八日の展示会の開成式のテラカットの様子です。

写真右から阿部久照義光会会長、森谷園人氏(山形大学プロジェクト教員)、八木浩司山形大学附属博物館長、今野清当財団理事長、大宮文子山形市文化振興課長

ご利用について

開館時間 午前9時から午後4時30分
入館料 無料
休館日 月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日)
12月29日から1月3日
交通 J.R山形駅より徒歩約15分
大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



平成27年3月発行
編集・発行 公益財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990-1004
山形市大手町1-153
TEL 023-1625-1710
FAX 023-1625-1710
http://ogamiyoshiaki.jp
印刷 株式会社大風印刷

